

令和8年度  
武蔵野大学

一般選抜 A 日程 2月5日 文系  
2時限

国語  
( 60 分 )

【注意事項】

1. 問題は28ページまでです。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、黙って手を挙げて監督者に知らせてください。
4. 解答用紙（A）には志望学科1の受験番号を記入し、受験番号の下のマーク欄にマークしてください。次に氏名、フリガナを記入し、解答する時限と科目（国語）にマークしてください。正しくマークされていない場合には、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙（A）の解答記入欄にマークしてください。例えば、



と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答記入欄の③にマークしてください。

（例）

解答番号	解答記入欄									
10	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

6. 問題冊子の余白等は適宜利用しても構いませんが、ページを切り離してはいけません。
7. 時間内に解答し終わっても、退出することはできません。
8. 途中で質問等があるときは、黙って手を挙げて監督者を呼んでください。

## 〔共通問題〕

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

現在、世界の共通語は英語になりつつあるが、近代以前の世界においては、宗教や文化を共有する文化圏ごとに共通語が分かれていた。そしてそれら近代以前の共通語は、同時にそれぞれの宗教、文化を象徴する経典を記載する聖なる言語でもあった。その代表はキリスト教文化圏のラテン語、イスラム教文化圏のアラビア語、そして東アジアの漢文であると言われ、ラテン語は聖書、アラビア語はコーラン、漢文は『論語』など儒教経典を記載する聖なる言語であったとされる。

このため漢文は東アジアのラテン語とよばれることもあるが、しかしラテン語、アラビア語と漢文には決定的な相違点がある。まずラテン語、アラビア語は、キリスト教、イスラム教という単一の宗教とミツセツに結びついているが、漢文は儒教だけではなく、仏教、道教など複数の宗教経典に用いられている。キリスト教文化圏、イスラム教文化圏に対して、東アジアをたとえば儒教文化圏、仏教文化圏など宗教で代表させることはできない。漢字文化圏という言葉が用いられるのは、そのためである。

次にラテン語、アラビア語は聖典の記載言語であると同時に口語でもある。現にラテン語やアラビア語で会話することは今でも可能である。これに対して、漢文はその発生当初から口語とは乖離した文言として作られており、中国人にとっても漢文で会話することは、不可能ではないにせよ、きわめて困難である。まして漢字の発音は、古代中国音に起源があるものの、中国の各方言（たとえば広東語、福建語など）、日本語、朝鮮語、ヴェトナム語では異なっており、そのまま各地の発音を聞いたのではまったく通じない。

そのため東アジアでは古くから、各国の人々が交流する場合、会話ではなく漢文による筆談を通じて意思疎通をはかった。たとえば江戸時代に日本に來た朝鮮の通信使は通訳も連れてきたが、重要な話は漢文の筆談で行ったのである。これは世界の他の文化圏にはルイレイのない珍しい現象であろう。

次に、特にラテン語の場合、キリスト教文化圏であるヨーロッパのほとんどの言語、たとえば英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語などは、みなラテン語と同じ系統の印欧語に属する。これに対して漢文のもととなる中国語は、中国の近隣に住むほとんどの民族の言語と系統が異なる。中国語は、ひとつの音節がひとつの意味をあらわし（漢字が一字、一音、一義を原則とするのはそのためである）、また語形変化がなく、おもに語順によって意味をあらわす、いわゆる孤立語であり、その仲間には同系統のチベット語や系統は異なるものややはり孤立語であるヴェトナム語ぐらいである。

これに対して、中国の東から北、西地域の言語である日本語、朝鮮語、満州語、モンゴル語、ウイグル語などはみな複音節語で、かつ日本語

の「てにをは」に相当する助辞を使って文を構成する、いわゆる膠着語<sup>(こうちやくご)</sup>で、中国語とは文法も語順も異なっている。いま中国語と日本語を対比してみると、たとえば、

我 wo.	愛 ai.	你 ni.	私は	あなたを	愛す
你 ni.	愛 ai.	我 wo.	あなたは	私を	愛す

のように、中国語の単語は単音節で、意味のちがいは語順によるのに対して、日本語は複音節の単語に「は」「を」という助辞をつけることで機能を示し、動詞には活用がある。

つまり日本や朝鮮半島など、古代から中国文化の学習に熱心であった中国近隣の国々の人々にとって、中国語は自国語と系統の異なるきわめて学習が困難な言語であった。とりわけ漢字ひとつひとつについている声調<sup>(注1)</sup>は、声調をもたないこれらの言語を母国語とする人間にとっては習得の難しいもので、現に朝鮮漢字音、日本漢字音では声調が脱落している。

しかし一方、中国文化の学習のためには会話能力は必ずしも必要でなく、その文章語である漢文を習得すればよかったのである。天台宗を開いた最澄は、遣唐使にしがたつて唐に留学した際、通訳僧の義真を連れて行った。おそらく会話が苦手だったのであろう。そして一年あまりの滞在中、せつせと漢文で書かれたブンケン<sup>(ウ)</sup>を集めて帰った。これが東アジアにおける中国文化学習の典型的なパターンであった。漢文を自国語に翻訳して読むという訓読が生まれた背景には、このような東アジアの特殊な言語事情がある。

訓読は、個々の漢字を日本語の意味で読むレベルと、文章の語順を日本語風になおして読むレベルの二段階からなる。ここではまず漢字の読み方から説明しよう。

日本での漢字の読み方には、音読みと訓読みの二種類がある。<sup>(注2)</sup>『論語』の例でいえば、「学」(ガク)、「時」(ジ)、「朋」(ホウ)は音読みで、これは古代中国の漢字音が日本語風になまったものである。現代中国語では、学(xue)、時(shi)、朋(peng)となり、日本の音読みと似ているものも似ていないものもあるが、これは日本では発音が日本語風になり、また中国でも長い間に発音が変化したためで、もとをたどればどちらも古い中国語の発音に行き着く。

なお音読みには右の学、時のようにひとつしか読み方がないものもあるが、多くの漢字には二通りの音がある。たとえば「人」は「人間」の場合は「ニン」、「人口」の場合は「ジン」と読み、また「間」には「カン」(間接)、口には「ク」(口調)の音もある。これらは「a」に「a」天「音 a」と、意味のちがいによって「b」「c」二つの発音があるのと異なり、同じ意味でありながら場合によって二つの音を使い分けている。

このうち人(ニン)、間(ゲン)、口(ク)のような読み方を呉音、人(ジン)、間(カン)、口(コウ)のような読み方を漢音というが、この呉音と漢音のちがいは、もとになった中国語の時代的、地域的相違である。日本がはじめて漢字を受け入れた四―六世紀の中国は南北に分裂していたため、日本には地理的に近い南朝の呉地方(今の江蘇省<sup>こうそ</sup>一帯)の発音が朝鮮半島<sup>ちやん</sup>ケイユでまず入ってきた。これが呉音で、当時伝来した仏教関係の語彙は今でも多く呉音で読む。しかし七世紀に入って唐が統一帝国を形成すると、文化の中心は唐の首都である長安(今の西安)に移った。そこで遣唐使などを通じて改めて長安の発音を学びなおした。それが、すなわち漢音である。

これはいつてみれば、<sup>(6)</sup>コップとカップは本来同じ言葉だが、江戸時代にまずオランダ語の *cup* がコップとなり、ついで明治以降、英語の *cup* がカップとなった、つまり学ぶべき対象の時代、地域の相違によってコップとカップが日本語に入り、使い分けが生じたのに似ている。中国語の南北の方言の差は、本来同系統のオランダ語と英語のちがいに<sup>(オ)</sup>もヒツテキするものであり、そこから呉音と漢音が生じたわけである。このほか、たとえば椅子、扇子の子(ス)や行灯(アンドン)など、中国のものと後の時代の発音が入った例もあり、これを唐音というが、唐音で読む場合はごく一部に限られる。

このように音読みが、呉音、漢音、唐音のいずれであれ、その起源が中国語の発音にあるのに対して、訓読みは、人(ひと)、間(あいだ)、口(くち)のように、その漢字の日本語の意味で漢字を読むことを指す。<sup>(7)</sup>つまり訓読みは本来、翻訳である。中国語以外の、たとえば英語の場合、*book* のブックという音を無視して、ただちに「本」と読むことはありえない。なぜ漢字の場合にだけ訓読みが生じたのであろうか。

それはまず漢字が表意文字で発音と直結していないからであろう。むろん漢字にも「同・洞・胴・銅」などがみな「同」を音符としているように、表音的要素がまったくないわけではない(このような文字を形声字という)。しかし「格(カク)・洛(ラク)」「被(ヒ)・破(ハ)」のように同じ音符をもつ形声字でも発音が異なる場合もあり、とにかく漢字の音をおぼえるのは<sup>(カ)</sup>メンドウである。それなら、どうせ中国語を話す必要はなく意味だけわかればよいのであるから、いっそ日本語の意味で漢字を読んでしまおうということになろう。

しかしむろんそれだけの単純な理由で、漢字を日本語で読むという発想の大転換が起こったわけではない。そこには漢字が伝来した当時のさまざまな事情が介在している。そのことを考えるひとつの手がかりは、「訓」という言葉にある。漢字を日本語で読むこと、さらには漢文を日本語の語順で読むことを、なぜ「訓」というのであろうか。

「訓」とは、解説して教えるという意味で、特に儒教の經典を教えるための注釈を指す。二字の言葉では「訓詁」とも言うが、「訓」は難しい言葉をわかりやすく説明すること、「詁」は古い時代の言葉を今の言葉で解釈することである。このほか難読字の音についての注記も含まれる。このような訓詁を主とする經典解釈は、儒教が<sup>(キ)</sup>コッキョウとなった漢代に盛んとなって訓詁学とよばれ、その後の經典注釈学の基本となった。

たとえば先の『論語』の一節の漢代の注釈では、「朋」に「同門曰朋」(同門を朋という)とある。これは、「朋」という漠然とした言葉をより具体的に、師を同じくする同門の弟子であるとわかりやすく解説したもので、いわば「訓詁」の「訓」に当たるであろう。また十二世紀の朱

子の注釈は、「説」について「説悦同」（説と悦は同じ）と述べる。これは、古代には「説」と「悦」は通用し、「説」は「はなす」「よろこぶ」どちらの意味にもなったのが、その後、使い分けが生じたので、ここでの「説」は「説く」ではなく、「悦ぶ」という意味であると説明したもので、古語を今語になおす「詰」にあたる。

なお經典の訓詁には少数ながら語順にケンキウしたものもある。『尚書』の「大詰」篇の「猷大詰爾多邦、越爾御事に詰ぐ」という一節に唐の孔穎達がつけた疏（注釈をさらに詳しく再注釈したもの）は、「猷」は「道」と同じ、「猷大」は「大猷」であるとしたうえで、「古人之語多倒、猶詩称中谷、谷中也」、つまり古代語の語順は逆さまである場合が多く、『詩経』の「中谷」は「谷中」の意味であると述べている。

古代日本人が漢字の日本語の読みを「訓」とよんだのは、つまり中国のこの訓詁の方法を借用したわけで、漢字を日本語で読むのは一種の注釈であると考えていたからであろう。訓詁がわかりやすい今の言葉による注釈であるなら、日本人にとってそれは日本語で注釈することにはならない。むしろ中国語の經典本文を、同じ中国語によって説明する訓詁学と、外国語である日本語で読む訓との間には大きな距離がある。つまり訓は訓でも、日本のそれは和訓であった。

しかしそれを「訓」とよんだことは、やはり両者を同じ概念でとらえていたことを示している。国家という概念がまだはつきりせず、言語構造についての知識も未熟であった時代、日本語と中国語が系統の異なる外国語であるという明確な認識はなかったであろう。しかも広い中国では、各地の方言ごとに漢字の発音はまちまちである。古代の日本人や朝鮮半島の人々が、自国語を中国語の方言と同じレベルで考えていたとしても無理はない。後世、自国語を漢文に対して「方言」「俗語」などとよんだ例があるのは、そのことを物語る。

とはいえこのような曖昧な言語認識は漢字が伝わった当初のことで、中国語に対する知識が深まるにつれ、中国語が日本語とはまったく別の言語であることは強く実感されたにちがいない。そしてその実感をより明確な認識に変えたのは、おそらく仏教の影響であった。

（金文京『漢文と東アジア——訓詁の文化圏』による。小見出しは省略した）

（注1）声調……音節内の高低や昇降などの音調。いくつかの種類に分かれ、語を区別する働きを持つ。

（注2）論語の例……論語には「子曰わく、学びて時に之を習う、亦た説ばしからずや。朋の遠方自ら来る有り、亦た楽しからずや。」という一節がある。

問一 傍線部(ア)～(ク)のカタカナに該当する漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は 1 ～ 8。

(ア) ミッセツ

1

- ① セツジツな問題
- ② 台風がセツキンしている
- ③ 万引き犯をセツユした
- ④ 最近カンセツが痛む
- ⑤ 話し合いの場をセツテイする

(イ) ルイレイ

2

- ① レイラクした平安貴族
- ② 海外留学をシヨウレイする
- ③ ジヨウレイに違反する
- ④ 贈り物へのヘンレイをする
- ⑤ リユウレイな文体

(ウ) ブンケン

3

- ① 社内のケンシユウに参加する
- ② ジケンが起きる
- ③ 老後に備えてシヨウケンを買う
- ④ 質の良い品をケンジヨウする
- ⑤ ケンヤクに努める

(エ) ケイユ

4

- ① 数値のゴウケイ
- ② 多くのケイケンを積む
- ③ 裁判でケイソウしている
- ④ ケイカイな足取り
- ⑤ 高い建物はケイカンを損ねる

(オ) ヒツテキ

5

- ① 予想がテキチユウする
- ② 状況に応じてテキギ対処する
- ③ 誤りをシテキする
- ④ 汽車がケイテキを鳴らす
- ⑤ ロンテキと舌戦を交わす

(カ) メンドウ

6

- ① 彼はトウリツができる
- ② シユウトウな準備を重ねる
- ③ きちんとトウセイがとれている
- ④ 人々がドウヨウしている
- ⑤ イチドウに会する

(キ) コツキヨウ

7

- ① ギヤツキヨウをはねのける
- ② キヨウエキの費用を積み立てる
- ③ ジュンキヨウした信徒
- ④ 遺跡からドウキヨウが発掘された
- ⑤ 四月からジヨウキヨウする

(ク) ゲンキユウ

8

- ① 領収書をセイキユウする
- ② 真相のキユウメイに努める
- ③ 責任をツイキユウする
- ④ シキユウお返事ください
- ⑤ 不正行為をキユウダンした

問二 空欄  にはある漢字一字が入り、空欄  ・  にはその漢字の二つの音が入る。それぞれの空欄に当てはまるものの組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は  。

- ① a .. 仰      b .. ギヨウ    c .. コウ
- ② a .. 声      b .. シヨウ    c .. セイ
- ③ a .. 回      b .. カイ      c .. エ
- ④ a .. 楽      b .. ラク      c .. ガク
- ⑤ a .. 色      b .. シキ      c .. シヨク

問三 傍線部(1)「漢文は東アジアのラテン語と呼ばれることもある」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は  。

- ① 東アジアの文化を代表する単一の宗教と結びついた共通語だったから。
- ② 世界のさまざまな文化圏において共通語として利用されていたから。
- ③ 特定の文化圏において共通語としての地位を占めていたから。
- ④ 東アジアにおいて広く誰でも使用できる共通語だったから。
- ⑤ ラテン語やアラビア語と同じ系統に属している言語であるから。

問四 傍線部(2)「重要な話は漢文の筆談で行ったのである」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 11。

- ① 漢文は書き言葉として表現されるのが原則であり、たとえ中国人であっても漢文を実際に発音することは難しかったから。
- ② 漢文の発音は国によって異なっており、重要な場で意思疎通をするためには書いたものを見せた方が正確なやりとりができたから。
- ③ 日本と朝鮮の人々が正確に意思疎通を図るためには中国語以外に選択の余地がなく、筆談でやりとりせざるをえなかったから。
- ④ 中国語は古くから話し言葉には不向きな言語であり、中国語の書き言葉である漢文も書いてやりとりする必要があったから。
- ⑤ 中国各地の方言の漢字音が伝わってしまったために漢文の発音が統一されておらず、筆談でやりとりしなければならなかったから。

問五 傍線部(3)「中国の近隣に住むほとんどの民族の言語と系統が異なる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 12。

- ① 中国語では漢字一字に対応して言語が作られているが、中国の近隣の言語では必ずしもそのような対応が認められないということ。
- ② 日本と中国は言語的につながりが薄く、実は歴史的に見ると文化や民族交流の面ではあまり関係性がないと考えられるということ。
- ③ 中国語と中国近隣に住む民族の言語は起源的に異なるものが多く、発音や文法などの言語的特徴において相違点が多いということ。
- ④ 中国語と近隣の民族の言語は根本的に構造が異なっており、漢文が用いられる以前は相互に意思疎通が困難であったということ。
- ⑤ 中国語においては声調が一つ一つの語に備わっているが、他言語においては漢文でも声調が意識されることはなかったということ。

問六 傍線部(4)「文章の語順を日本語風になおして読むレベル」とあるが、中国語を日本語の語順になおして読む際にはどのような操作が必要であると考えられるか。本文の破線で囲まれた日本語と中国語の例を参考にして、最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 13。

我 wo <sup>2</sup>	愛 ai <sup>1</sup>	你 ni <sup>2</sup>	私は	あなたを	愛す
你 ni <sup>2</sup>	愛 ai <sup>1</sup>	我 wo <sup>2</sup>	あなたは	私を	愛す

- ① 日本語は目的語の後に動詞が置かれるのに対し、中国語は動詞の後に目的語が置かれるという語順になっているため、動詞と目的語の順番を入れ替えて読む必要がある。
- ② 日本語は主語の後に動詞が置かれるのに対し、中国語は動詞の後に主語が置かれるという語順になっているため、動詞と主語の順番を入れ替えて読む必要がある。
- ③ 日本語は目的語の後に動詞が置かれるのに対し、中国語は動詞の後に主語が置かれるという語順になっているため、主語と目的語の順番を入れ替えて読む必要がある。
- ④ 日本語は動詞の後に主語が置かれるのに対し、中国語は動詞の後に目的語が置かれるという語順になっているため、動詞と目的語の順番を入れ替えて読む必要がある。
- ⑤ 日本語は動詞の後に主語が置かれるのに対し、中国語は主語の後に動詞が置かれるという語順になっているため、動詞と主語の順番を入れ替えて読む必要がある。

問七 傍線部(5)「多くの漢字には二通りの音がある」とあるが、二通りの音を持つ漢字を、次の中から二つ選び、番号で答えなさい。ただし、解答順は問わない。解答番号は 14・15。

- ① 定
- ② 哀
- ③ 組
- ④ 骨
- ⑤ 号
- ⑥ 万
- ⑦ 夜

問八 傍線部(6)「コップとカップ」の例が挙げられているが、以下の語の使い分けに関する記述のうち、「コップとカップ」と同様の事例と言えるものはどれか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 16。

- ① 日本語の「サボる」とフランス語の「サボタージュ」はいずれも同じ語を起源としているが、日本語では「サボる」は一般的な怠慢行為を表し、「サボタージュ」は労働争議を表すという違いがある。
- ② 英語の「マンション」とフランス語の「メゾン」はいずれも同じ語を起源としているが、英語では「マンション」が大邸宅を表し、フランス語では「メゾン」が一般的な住居を表すという違いがある。
- ③ 日本語の「ごはん」と英語の「ライス」はいずれも類似の概念を表すが、日本語では「ごはん」は茶碗ちやわんに盛られた白米を表し、「ライス」は皿に盛られた白米を表すという違いがある。
- ④ 日本語の「アルバイト」とドイツ語の「アルバイト」はいずれも類似の概念を表すが、日本語では「アルバイト」が短期の非正規雇用を表し、ドイツ語では労働全般を表すという違いがある。
- ⑤ 英語の「カード」とドイツ語の「カルテ」はいずれも同じ語を起源としているが、日本語では「カード」は四角い紙片状のものを表し、「カルテ」は診療記録を表すという違いがある。

問九 傍線部(7)「つまり訓読みは本来、翻訳である。」とあるが、漢文訓読以外の翻訳と訓読みとはどのような点が異なっていると考えられるか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 17。

- ① 漢文訓読以外の翻訳では他言語の文字をそのまま日本語で読むことはできないが、漢文訓読においては漢字表記によって容易に中国語の発音を判別して読めるという点。
- ② 漢文訓読以外の翻訳では原文の発音をなるべく残して日本語に置き換えるが、漢文訓読においてはいずれの漢字も対応する日本語の訓に置き換えられて読まれるという点。
- ③ 漢文訓読以外の翻訳では原文の発音を無視してそのまま日本語に置き換えることはできないが、漢文訓読においては漢字が発音を表すことがないために日本語として読めるという点。
- ④ 漢文訓読以外の翻訳では原文の発音や意味を把握していなければならないが、漢文訓読においては漢字の発音や中国語での意味を把握せずに対応する日本語の意味で読めるという点。
- ⑤ 漢文訓読以外の翻訳では原文の表記を残したまま日本語で読むということは行われぬが、漢文訓読においては中国語の表記を残したまま日本語として読まれるという点。

問十 傍線部(8)「中国のこの訓詁の方法を借用した」とあるが、古代日本人は漢字の「訓」をどのように考えていたと述べられているか。

筆者の考えとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 18。

- ① 漢文に用いられるわかりにくい語や古い語に対する説明を漢字の注釈と見なし、それらの注釈や解説の中国語を日本語に翻訳して読んだものを「訓」と考えていた。
- ② 個々の漢字の中国語における発音を日本語風に読むことを一種の注釈であると見なし、そのような読みに基づく漢文や漢字の解釈を「訓」と考えていた。
- ③ 中国語で書かれた経典の本文をわかりやすい中国語で理解することを広く注釈であると見なし、経典の解説に対する日本語の翻訳と解釈を「訓」と考えていた。
- ④ 漢文や漢字をわかりやすく日本語に置き換えて読むことを注釈であると見なし、原文の語順を入れ替えて読むことまで含めた解釈の方法を「訓」と考えていた。
- ⑤ 難しい意味の漢字や後の時代に使い分けが生じた漢字に対する日本語の翻訳を注釈と見なし、個々の漢字に定着したそれらの翻訳を「訓」と考えていた。

問十一 傍線部(9)「自国語を漢文に対して『方言』『俗語』などとよんだ例がある」とあるが、なぜ筆者はこのような例を挙げていると考えられるか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 19。

- ① 古代の東アジアにおいては中国語とその他の言語は漢字が伝わった当初から明確に区別されており、古代の日本人は中国語で書かれた経典を解釈するために多くの労力を割いていたということを主張するため。
- ② 古代の東アジアの人々は自国の言語と漢文で書かれた中国語との言語的な相違を明確に認識できておらず、古代の日本人も中国語による説明である訓詁と日本語で読む訓を近いものと考えていたということを主張するため。
- ③ 古代の東アジアの人々は言語的な知識が不十分だったために自国語と中国語を明確に区別することができておらず、古代の日本人も日本語と中国語が共通の言語から分化した同じ系統の言語だと認識していたということを主張するため。
- ④ 古代の東アジアでも中国語の方言的な差異は外国語に相当するようなものであることが知られており、古代の日本人も言語の系統的な違いと方言的な違いが厳密には区別できないと捉えていたということを主張するため。
- ⑤ 古代の東アジアにおいては漢文で書かれた経典を読むことが重要な教養であると見なされており、古代の日本人は中国語による訓詁と日本語による注釈の違いを認識しながら漢文の経典を参照していたということを主張するため。

問十二 枠線内の文A～Eは、それぞれ本文の内容の一部分を要約したものである。これらの文を本文の構成に合致する順序に並べ替えたものとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 20。

- A 漢字の音読みに複数の種類があるという事実に対し、その文化的・言語的背景を具体的な例とともに説明している。
- B 日本において漢字を日本語で読むことを「訓」と呼ぶことになった要因を、古代の言語認識を推定しながら論じている。
- C 世界の各文化圏を代表する共通語とその歴史をとりあげつつ、各文化圏の共通語に対応する宗教や経典を紹介している。
- D 漢字文化圏の共通語である漢文と、他の文化圏の共通語であるラテン語やアラビア語との文化的・言語的相違点を列挙している。
- E 中国における「訓」の意味合いや関連する学問的歴史について、古典の記述を引用しながら詳細に述べている。

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| C | D | C | D | C |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| D | C | D | C | A |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| A | E | A | A | D |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| B | B | E | B | E |
| ↓ | ↓ | ↓ | ↓ | ↓ |
| E | A | B | E | B |

〔選択問題〕〈現代文〉か〈古文〉かの、どちらかを選択して、一方のみを答えなさい。

〔二〕〈現代文〉 次の文章は、一九五六年にアメリカの広告業者のヴィカリーが映画『ピクニック』の上映中に「ポップコーンを食べろ」「コ

カ・コーラを飲め」というメッセージの書かれた画面を1/3000秒だけ映し出すことを企て、六週間続行したところ、売店でのポップコーンとコカ・コーラの売り上げが増大したという話の真偽を論じた文章の一部である。このヴィカリーの広告は「いさか闕下（サブリミナル）効果」を利用した例とされてきた。「いさか闕」とはやつと感じられるか感じられないかのぎりぎりの強さである境界をいう語であり、「サブリミナル効果」とは微弱過ぎて感じられない刺激である「いさか闕下刺激」が人の判断・行動・生理状態に与える効果をいう語である。この文章を読み、後の問いに答えなさい。

ヴィカリーのサブリミナル広告の効果は、論理的に証明不能ということに加えて、現実問題としても、証明不能である。マスメディアが、映画の観客やテレビやラジオの視聴者など不特定多数の人々に向けて、そうしたことをしてはいけない、という自主規制を敷いてしまったからである。つまり、ほんとうに効果があるのかどうかは不問に「A」、とにかくそうしたことは倫理的に許されないことだという判断を下してしまっただけだ。これで、ヴィカリーのサブリミナル広告の効果は、実験的に証明不能の事柄になり、一種の迷宮入りを果たした。<sup>(1)</sup>同時にそれはひとつの神話にもなってしまった。

ここで注意しておくべきことがある。それは、<sup>(注1)</sup>認知心理学で言う「意識下（いさか闕下）」と<sup>(注2)</sup>フロイトの「無意識」には大きな違いがあるということである。この二つを混同しているために、話がわけのわからないところに行ってしまうのだ。

フロイトの無意識は、抑圧されて意識にのぼってこないものである。抑圧されているものは、たんに意識されないだけでなく、<sup>(注3)</sup>先ほど述べたようにネガティブな内容を含んでいる。一方、認知心理学で言う意識下あるいはいさか闕下は、処理容量や意識や注意の限界の問題である。ある刺激が意識されないことがあるのは、それが十分な処理を受けていなかったり、重要でなかったり、注意が向けられなかったりしたからであって、ネガティブな内容をもつからではない。

違いは、もうひとつある。いさか闕下知覚では、いまここにある刺激が意識にのぼらない。これに対して、フロイトの「無意識」では、意識にのぼらないのは、過去の体験や出来事である。心理学者の多くも、実はこの二つを明確には区別してこなかったし、いまも漠然としか区別していない。

これには、<sup>(2)</sup>日常的なことばの使い方も関係している。「無意識」は、「意識」されざるものを指すわけだが、「意識」ということばは、多様な使われ方をする。彼女の存在を意識する、意識を失う、意識改革、自意識過剰、などなど。これらは日本語の例だが、英語でも consciousness、

awareness, arousal)といったことがあって、さらにそれぞれが多様に使われる。専門的にも、意識が、覚醒のレベルを意味することがあったり、注意状態を指したり、自覚の状態を指したり、あるいは状態ではなく意識内容そのものを指したりすることがある。もともと「意識」や「無意識」ということは自体に、使う人の間で混同、誤解、齟齬そごや矛盾を生じさせる可能性がある。これでは、ことばの使い方の交通整理をするのが関の山で、意識や無意識を定義するどころの話ではない。

以上のような問題があることを念頭におきながら、ここで少し落ち着いて、ヴィカリーやそのあとの支持者（たとえばブライアン・キイ）の言うサブリミナル広告を論理的に考えてみよう。

まず、サブリミナル広告そのものについて最小限言えるのは、「①刺激が閾下である→意識にのほらない」ということだけである。一方、フロイトの考えでは、「②ある欲求が無意識のなかに抑圧されている→（本人の自覚のないまま）その欲求が行動に影響をおよぼすことがある」。

このように、①と②は、まったく別のことである。ところが、<sup>3)</sup>「無意識」という共通の用語を使うと、この二つがなんとなくつながる（「B」↓「C」）ような感じがしてしまうのだ。ここで多くの人は、煙けむに巻かれてしまう。

では、①と②の間を埋める論理的ステップはなんだろうか。少なくとも必要なのは、「刺激が閾下なので意識されない→その内容は無意識のなかに記憶として残る→残った記憶は抑圧されたものと同等の機能をもつ」ということである。しかし、無意識のなかに残ったと仮定されているものは、欲望ではない。それは単なるメッセージである。したがって、このメッセージが「指示された行動を本人にとらせるだけの暗示的な効果を果たさ」なければならぬ。このように、サブリミナル広告の効果が生じたというのなら、いまカギカッコでくくっただけのことがなくてはいけない。

<sup>1)</sup>少し四角張った言い方をしすぎたかもしれない。くだけた言い方をしてみよう。押し売りに、ただ見せられただけのメッセージが（いや、自覚的には、見せられてもいないメッセージが）、強い影響をおよぼして欲求を生じさせ、それがメッセージの指示する購買行動を引き起こすというのだ。そんなことがあるわけがない！ちゃんとメッセージが見えていたって、ふつうはほとんど効果がないからだ。これがどれだけバカなことを言っているかは、これを逆方向に言い換えてみるとよくわかる。すなわち、「はつきり見せられたものほど、そして意識されたものほど、効果がない。見えないものこそ、つまり無意識であるものこそ、効果がある」。

ヴィカリーのこうした与太話よつぱがなぜ一気に広まり、信じられてしまったのか。これだけ信憑性しんぴやうせいのない話が受け入れられるからには、それなりの素地や土壌が用意されていたと考えなければならぬ。

ひとつには、当時、フロイトの考え方がアメリカ社会のなかに根をおろしつつあったということがある。精神分析が（少なくとも中・上流階級の）一種のライフスタイルに組み込まれ、精神的に健康な人も、自分が最近見た夢などを精神分析家に語って診断や助言を仰ぐことが生活の一部になっていた（これを、それまで行なわれてきた、教会での懺悔ざんげや告解こっかいの習慣の一種の変形だとみなす人もいる。そうかもしれない）。夢

解釈や無意識といった考え方が、かなり広く受け入れられていたのだ。

第二に、当時は、人の心を操ることができ（逆に自分の心がほかの人間によって操られることがあるかもしれない）ということが、ある種の恐怖心と警戒心をもって考えられていた。一九五〇年代の半ばと言っても、まだ第二次世界大戦の記憶が生々しくあった時代である。ヒットラー率いるナチスがなぜドイツ国民の支持を得、その指示で人々はユダヤ人の大量虐殺をはじめとしてさまざまな非人道的なことを実行したり、許容したりすることができたのか。なぜ人は煽動<sup>せんどう</sup>されてしまうか。なぜ権威者のいいなりになったりするのか。ナチス・ドイツと似たような事態を招かないように、省みることができ省みるべきであった。それが社会に課せられた課題であった。心理学でも、権威への服従がどのように起こるか、絶対的な権力を行使できる場合にはどういうことをしてしまいか、個人の意見や行動が周囲の影響をどのように受けるか（同調行動、集団の圧力、説得）が研究の焦点として、盛んに研究されていた。サブプリミナル広告は、まさにそうした大衆の心理操作のおそるべき事例でありえた。

第三に、一九五〇年代後半、映画やラジオといった視聴のメディアに、テレビが加わったということがある。アメリカでは家庭向けのテレビ放送が開始されるのが一九五〇年であり（ちなみに日本は五三年）、テレビをもつ家庭が急速に増えつつあった。つまり、映画館に行かずとも、日常的にサブプリミナル画面にさらされる危険が存在し始めていた。

そして、最後にあげるのは、このなかでもっとも直接的な伏線かもしれない。それは、ヴァンス・パッカードというアメリカ人ジャーナリストの書いた『かくれた説得者』という本が、一九五七年の半ばに出版されたことである。この本は、消費者の購買意欲をどのようにして操作すればよいか、人を効果的に説得するにはどうすればよいか（<sup>げ</sup>下司な言い方をする）、**D**にはどうするか）など、さまざまな心理的手法について述べている。そのなかでは、意識下の欲求を操作する方法も紹介されている。この本は、飛ぶように売れ、一九五七年の九・一〇月期には全米のノンフィクション部門第一位、一一・一二月期には第二位を占めた（日本でも、翻訳が翌年の五八年に出版されている）。ヴィカリーの実験の話がマスメディアにセンセーショナルにとりあげられたのは、この同年の九月であった。そのニュースが大きなインパクトをもったのは、このパッカードの『かくれた説得者』が売れていたからにはかならない。人々は、パッカードの本を読んで、<sup>4</sup>そうした決定的な「実験」の話<sup>4</sup>を期待していたのだ。

（鈴木光太郎『オオカミ少女はいなかった』による。小見出し・注など一部本文を省略した）

（注1）認知心理学……知覚・記憶・思考など、人間の認知活動について研究する心理学の一分野。一九五〇年代以降、活発になった。

（注2）フロイト……オーストリアの精神科医で精神分析学者（一八五六～一九三九）。

（注3）先ほど述べたようにネガティブな内容を含んでいる……筆者はこれより前の箇所、フロイトのいう「無意識」に押し込まれているものとして、「その

人の自我を脅かすような不快な体験、苦痛、恐怖、倫理にもとる欲望（とりわけ性的な願望）、葛藤状態などを挙げている。

問一 波線部(ア)「関の山」・(イ)「四角張った」・(ウ)「与太話」の意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は(ア)は  ・(イ)は  ・(ウ)は  。

(ア) 関の山

- ① 一般的な人が達することのできる目標
- ② 一生懸命やってそれ以上はできないという限度
- ③ はじめて取り組んだときに実現し得る限界
- ④ とりわけ難しい問題の中でも最も難解である点
- ⑤ 交通の要衝のように多数の人が至りつくところ

(イ) 四角張った

- ① 威圧的で人に有無を言わせない
- ② 格式が高く超絶的である
- ③ 打ち解けず改まっていて堅苦しい
- ④ 柔軟性に欠けていて親身でない
- ⑤ よそよそしくて理解しがたい

(ウ) 与太話

- ① 酔っぱらいのたわごと
- ② 行き過ぎた冗談
- ③ ばかばかしいいい加減な話
- ④ 真実のない作り話
- ⑤ 正式な場でははばかれるうわさ話

問二 空欄 A・D に入れる語句として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号は A は

24・D は 25。

A

24

- ① 委ねて
- ② 接して
- ③ 具して
- ④ 付して
- ⑤ 奏して

D

25

- ① 人の顔をうかがう
- ② 人の口車に乗る
- ③ 人の鼻をあかす
- ④ 人をあごで使う
- ⑤ 人を手玉にとる

問三 傍線部(1)「同時にそれはひとつの神話にもなってしまった。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 26。

- ① マスメディアがサブリミナル広告を危険視して自主規制を敷いてしまい、ヴィカリー以外は誰もその効果を二度と試すことはできなくなったため、ヴィカリーのその広告の効果が本当にかどうかを同じ実験を通して再検証することができなくなった。と同時に、不思議なことにヴィカリーの信奉者が増え、ヴィカリーは一躍有名人になった。
- ② マスメディアがサブリミナル広告の効果がうさん臭さに気づいて人々が真似する前に規制を敷いてしまった結果、ヴィカリーよりあとの人はサブリミナル広告の効果を実際に確認することができなくなった。また、誰も真似して検討することができなくなったからこそ、ヴィカリーのサブリミナル広告は一般の人々には手の届かない不可思議な試みとして人々を魅了し続けた。
- ③ マスメディアがサブリミナル広告の効果をはっきりと検証する前にそうした広告を禁じる自主規制を行ない、結果として誰もその効果を立証も否定もできなくなった。また、立証されないからといってヴィカリーのサブリミナル広告の逸話は眉唾物として斥けられるということもなく、かえってその話を広めようとする著者・学者が多数現れた。
- ④ マスメディアがサブリミナル広告を禁じる自主規制を敷いてしまったために、ヴィカリーよりもあとの人々はサブリミナル広告の効果を再現する実験が行えず、ヴィカリーの話が捏造かどうか分からないままとなった。また、検討不能になったためにこそ、ヴィカリーの話が驚異的な事実としてまことしやかに伝えられ続け、人々に信じられ続ける結果となった。
- ⑤ マスメディアがサブリミナル広告を倫理的に許されないこととして禁じてしまったために、ヴィカリーよりもあとの人々はヴィカリーの行なった広告を真似して行なうことができなくなり、サブリミナル広告の効果が本当かどうか証明不能となった。また、検討不能になったからこそ、サブリミナル効果に憧れてひそかに真似したがる者が絶えないという結果となった。

問四 傍線部(2)「彼女の存在を意識する、意識を失う、意識改革、自意識過剰、などなど。」とあるが、この箇所各語句に関する説明として適切でないものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 「意識改革」の「意識」は、単独の語としては人・物事・状態などへの気のかけ方や何かに気づいていることをいうが、特に根本的な考え方・価値観・取り組み方などということがある。
- ② 「自意識過剰」の「自意識」は自分という存在に気づいている心の働きをいうが、周囲と自分を区別して自分というものをとらえる意識であるところから、自分が他者からどう見られているかを気にする心の働きの意を含み得る。
- ③ 「彼女の存在を意識する」というときの「意識する」とは、単に「彼女」がある場所にいることに注意を向けるという意味にとどまらず、「彼女」を特別な存在として我知らず気にしてしまう意を含むことがある。
- ④ 「意識を失う」とは「気を失う」という表現と重なるところがあり、他者を認識したり、また、ある物事を考えたり感じたりする心の働きをなくした状態になることである。
- ⑤ 「意識改革」の「意識」とは、「意識が高い」というときの「意識」と同様に、常に社会的な物事に対する関心の意で用いられていることばである。

問五 傍線部(3)「無意識」という共通の用語を使うと、この二つがなんとなくつながる(    )「だ」とあるが、この傍線部中の「    」の箇所には「この二つがなんとなくつながった結果としてサブリミナル効果が生じること」を表わす語句が入る。空欄  ・  に入れる語句として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。解答番号はBは  ・Cは 。

- ① 刺激が閾下である
- ② 意識にのぼらない
- ③ 無意識のなかに記憶として残る
- ④ 無意識のなかに抑圧されている
- ⑤ 行動に影響がおよぶ

問六 傍線部(4)「そうした決定的な「実験」の話を期待していたのだ」とあるが、どういうことか。当時の時代背景も踏まえた説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 30。

- ① 人の心は他人から操作され得るのかもしれないという意識が人々の間に強くあり、テレビという新しいメディアによる煽動の可能性も生じ始めていたこの時代、人々はパッカードの心理操作の手法を記した著書を読みふけり、大々的な大衆の心理操作がいつか現実のものとなるだろうと恐れ、パッカードの所説の試金石となるような事例を求めていた、ということ。
- ② 他人から心理を操作されるかもしれないという不安が人々の間で高まり続けていたこの時代、テレビという新しいメディアを通して大衆煽動が日常的に生じる基盤もできつつあった。このような中で、パッカードの著書は個人が心理操作する主体となり得るという関心を強く喚起し、その説の正しさを知ることができる具体例を人々は首を長くして待ち望んでいた、ということ。
- ③ 人の心理は他人から操作され得るのかもしれないという恐怖心や警戒心を人々が抱いていたこの時代、テレビを通じて日常的にサブリミナル画面にさらされる危険も生じつつあった。このような中で、心理操作の手法を記したパッカードの著書が大々的に売れ、人々は大衆の心理が操作される例が現実起こることを予期し、たやすく信じてしまいそのような風潮の中にあった、ということ。
- ④ なぜ人は煽動されるのかといった恐怖心や警戒心のようなものが人々の間には根強くあり、テレビという新しいメディアの持つ力への警戒心も加わる中、パッカードの『かくれた説得者』はそうした疑問を解いてくれるきっかけとなった著書であった。そのため、人々はパッカードの著書の内容が正しいことを実際に確認することができる具体例を求めていた、ということ。
- ⑤ 人が周囲の影響を受けて行動すること、権威者に服従してしまうことを問題視する傾向が人々の間に色濃くあった上、テレビによるサブリミナル効果が日常的に生じ得る状況も整いつつあった。このような中で、心理操作の方法を紹介するパッカードの著書が爆発的に売れたことは人々の恐怖心や警戒心をいよいよそそることにになり、人々はこの著書の内容を否定する材料を求めていた、ということ。

〔二〕 〔古文〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(A) 近ごろ、近江の国海津に、金といふ遊女ありけり。その所の沙汰の者なりける法師の妻にて、年ごろ住みけるに、件の法師、またあらぬ君に心うつしてかよひけるを、金もれ聞きて、やすからず思ひけり。ある夜、合宿したりけるに、法師なに心なくて例のやうにかの事くはだてむとて、股に挟まりたりけるを、その弱腰を強く挟みてけり。しばしはたはぶれかと思ひて、「はづせはづせ。」と言ひければ、なほ挟みつめて、「わ法師めが、人あなづりして、人こそあらめ、おもてをならべたる者に心うつして、ねたきめ見するに、物ならはかさむ。」と言ひて、ただ締め締めまざりければ、すでに泡を吹きて死なむとしけり。その時はづしぬ。法師はくたくたと絶え入りて、わづかに息ばかりぞかよひける。水ふきなどして、一時ばかりありて生きあがりけり。

かかりけるほどに、その頃、東国の武士大番にて京上りすとて、この海津に日たかく宿しけり。馬ども湖に引き入れて冷やしける。その中に竹の棹さしたる馬の、ゆゆしげなるが、物に驚きて走りまひける。人あまた取り付きて引きとどめけれども、物ともせず引きかなぐりて走りけるに、この遊女行きあひぬ。すこしも驚きたることもなくて、高き足駄をはきたりけるに、前を走る馬のさし縄のさきをむずと踏まへてけり。踏まへられて、馬かいこづみて、やすやすと止まりにけり。人々目を驚かすこと限りなし。その足駄、すなごに深く入りて、足首までうづまれにけり。それより、この金、大力の聞こえありて、人怖ぢあへりける。自らいひけるは、「わらはをば、いかなる男といふとも、五六人してはえ従へじ。」とぞ自称しける。

ある時は、手をさしい出して、五の指ごとに弓を張らせけり。五張を一度に張らせける指ばかりの力、かくのごとし。まことにおびたしかりけるなり。

(『古今著聞集』による)

(注1) 海津……琵琶湖の北岸の地。

(注2) 沙汰の者……評判の高い者。

(注3) あらぬ君……ほかの遊女。

(注4) わ法師め……「わ」はここでは相手を軽侮する気持を表す。

(注5) 大番……平安時代後期および鎌倉時代の内裏や院御所の警護に当たった大番役。

(注6) 高き足駄……齒の高い下駄。

(注7) かいこづみて……つまずきよろめいて。

問一 傍線部(A)「心うつしてかよひける」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は 。

- ① 情がわいて手紙を交わした
- ② 浮気心を起こして行き来した
- ③ 身は行かずとも常に思いを届けた
- ④ 心を入れ替えてまめに出掛けた
- ⑤ 恋の炎を燃やして通い続けた

問二 波線部(A)「生きあがり」にけり」・(イ)「手をさしだし」の主語として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は (ア)は  ・(イ)は 。

- ① 金といふ遊女
- ② 法師
- ③ あらぬ君
- ④ 東国の武士
- ⑤ 竹の棹さしたる馬
- ⑥ 人々

問三 傍線部(B)「やすやすと止まりにけり」の文法的説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

34。

- ① 副詞 + 上二段活用の動詞 + 終助詞
- ② 副詞 + 四段活用の動詞 + 過去の助動詞 + 詠嘆の助動詞
- ③ 副詞 + 四段活用の動詞 + 完了の助動詞 + 過去の助動詞
- ④ 副詞 + 名詞 + 格助詞 + 完了の助動詞
- ⑤ 副詞 + 上二段活用の動詞 + 格助詞 + 過去の助動詞

問四 傍線部(C)「足首までうづまれにけり」の表現に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答

番号は 35。

- ① 人並み外れた力で対抗しているものの、馬の強い力に徐々に押されて負けてしまいそうであるという危機感を伝えている。
- ② 馬をも跳ね返すような絶大な腕力を誇ってはいるが、脚力の方はやはり馬にとうてい敵うものではないという無力感が漂っている。
- ③ 尋常ではない女の脚力が、女の履いていた下駄と深い砂地との間に激しい摩擦を引き起こしているかのよう錯覚させる。
- ④ 女は東国の武士が決して履くことのない高下駄を履いており、下駄の力を借りてこそ驚異的な脚力が発揮されたことを暗示している。
- ⑤ 猛烈な勢いで進む馬が、手綱を踏みつけた足の力で行く手を急に阻まれた息をのむような場面の様子が伝わってくる。

問五 本文が「金といふ遊女」について伝えていることの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

36。

- ① 日本の中世には、不実な夫をその力をもってやり込め、武士が扱いかねる馬をも制御し、弓の弦をも自身の手指の力で張るなど、乱世をたくましく生き抜こうとする風潮を体現するような人物が女性の中から現れたのであった。
- ② 金という近江の国の女はたいへん正義感が強い人物であり、自身の夫でも東国の武士であっても分け隔て無く平等に接し、弱き者を助け、強き者をくじく偉大な英雄であった。
- ③ 近江の国にいた遊女金は、不実な男はとことん懲らしめ、また武士も扱いかねる暴れ馬を止めるなど、たいへん力の強い女であり、大力であることを自任してもいた豪快な人物であった。
- ④ 法師でありながら複数の遊女と交流する者には、自身の股の筋肉の力を駆使して抵抗し、飼い主の武士の言うことを聞かず逃げまわる馬には、その手綱を踏みつけて制止するなど、金はいかにも強い足腰を備えた女であった。
- ⑤ 遊女金はとにかく指の力が常人よりも秀でており、例えば逃げる暴れ馬に対しては、その手指の力で突進を止め、次に足指の力を駆使して馬の勢いをくじくほどであり、武士の使う弓の弦をも自身の五本の指の一つずつで張るほどであった。

問六 『古今著聞集』と同じジャンルの作品を次の中から一つ選び、番号で答えなさい。解答番号は

37。

- ① 『古今和歌集』
- ② 『閑吟集』
- ③ 『無名草子』
- ④ 『沙石集』
- ⑤ 『今鏡』